

もしている。それは恐らく、当時の、キリストの内的な構造を解剖学的に理解しようとする、キリスト論全盛の時代背景と無関係ではないだろう。つまり、ディオニュシオスは、認識が対象を所有することである限りにおいて、キリストを直接の認識の対象としてしまうことで、キリストを我が物として把握することを避け、それとは別な態度を取ろうとしている。彼は、キリストをヒエラルキアとの関係において論ずることで、キリストを神と天使と人間とを連結する、なんらかの「場」として描き出している。「場」である限りにおいて、キリストは対象化されることはない。しかし、人間も天使も、その「場」の中で行為するがゆえに、決してキリストと無関係に在るのではない。むしろ、彼のキリストは決定的な仕方、神と天使と人間とを媒介している。

転回と回心

——バルトとアウグスティヌスの場合——

松田健三郎

バルトはアウグスティヌス(以下A)を「造られざる霊を造られた霊の連続の中に求めていた」とみる。「あなたを知るようになつて、…いつも、あなたを記憶の中に見出すのです」を言質とする。またオステイアの直視を評していう、「神の認識は恩寵によって呼び起され、導かれるとは言え、やはり、自己

の内なる努力、絶えず上昇して行く超越化の長い階段の最後の一步である」と。「造られざる霊を、造られた霊の連続の中に求めていた」とされる所以である。対して、バルトは神と人間との間の非連続性を主張する。問題は、もとより、「主なる神と人間との間の非連続性」そして「神と被造物との間の連続性」にある。「かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい」を註解していう。われわれの「肢体」、つまりわれわれの死ぬべき体に見られるこの並行性を可視化するという意味でそうするのでないなら、恵みは恵みでないだろう。この連続性を註解していう。この可能性は不可能なもの可能性である。バルトは、Aとの差異をこの不可能の可能性にみる。そこにかれの「死から生への転回」がある。この観点から、オステイアの直視は批判された。「私たちは段階的にすべてのものを通り過ぎ、ついに精神に到達し、…さて私たちは、知恵について語り、喘ぎ求めながら、全心の力をこの一挙に込めて、ほんの一瞬それに触れました。」ここに「連続性」をみることも可能であろう。『三位一体論』は直視失敗を次々と描いてみせる絵巻物である。Aは、一たること望んで生きた。それは、オステイアの直視の記述、「ほんの一瞬それに触れました」が、また、「わたしたちが思いを伸ばし、万物をこえてとどまりたもう永遠の知恵にあわただしい思惟によってふれたように」とも表現されていることから了解される。「思惟」は、その語源として「集める」をもつ。したがって、直視とは、ばらばらになつていゝもの、分裂してゐるものを一

第2部会

つに集めること、さらには超越的なものへの赴きを意味している。その直視の記述において、思惟が用いられているのは、意味なきことではない。三位一体、は三である独立自由な主体が、一なる完全な交流を実現している神の内的構造を示し、人間にも在るべきかたちを示す指標として機能する。しかし、第八巻は、直視の立場が全体的人間を三位一体から照射するどころか、心と身体という部分を別々に生きるAの分裂の事態を暴露する。そして、この暴露は、希求される全体的人間の成立へと逆転し、機能する。「ロゴスがサルクスになった」。それは、キリストが一つのペルソナのうちに二つの本性を生きることを意味する。自己の一たることの実現の希求が、こうしてロゴスとサルクスの結合、すなわち、不可能の可能に転じる。翻れば、直視における枢要的記述、「あわただしき思惟によつて」が、つとにそれを用意していたともいえる。バルトはいう。もしこちらとあちらのとの間にある深い裂け目をもとと埋められていないなら、どうしてわたしはわたしに真理の準備をしてくれる、無限の、甘い、苦い艱難を経験することができるのだろうか。しかし、ともにいわれる。神の存在とわれわれの存在の間の連続的な関連が生じるような、何ものも存在しない。ここにみられるのは、不可能の可能としての連続性である。このような観点から、バルトはAを連続性ゆえ批判する。たしかに、『告白』にみられる直視に、その批判を向けることは可能であるようにもみえた。しかし、その直視において枢要的機能を果たす思惟があわただしいものであったと記述されていることに留意し、それが「ロゴスがサルクスになった」への潜勢態

であることをみると、そこには不可能の可能に照射されてみずからの一であることを企てるAの回心を読み取ることができないのではないか。

進化における宗教の問題

滝澤 克彦

日本の宗教学において、宗教の進化ということが論じられなくなつて久しい。もちろん、社会科学全体においては、ドーキンスやスペルベルなどによつて提示された新たな進化論的枠組みのなかで宗教の問題は軽視できない主題として扱われてきている。それに対して、宗教研究では、宗教の進化は宗教史に向けられた特定の文脈に定置され、後には社会進化論と密接に結びつく形で独自の展開を示してきたが、このような意味での宗教進化論は現在ではほとんど省みられなくなつている。そのような流れは「宗教史」の一端に位置づけられ、脱構築の対象として、あるいはより素朴な意味での「批判的」歴史学に晒される限りで、存在価値を保っているかのようなのである。

宗教進化論への批判は、宗教を序列化することによる優劣などの価値判断の危険性に向けられてきた。また、その点こそ、脱構築が最も適切な形で近代性に引きつけて批判の効力を発揮するところである。この危険性は、その枠組みを問題としている以上、例えばアニミズムを美化することなどによっては排除